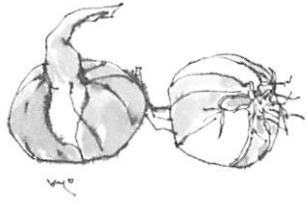
3―おむつ随時交換

任運荘の随時交換は、平成二年七月より尿とりパットと布おむつ併用に変更。増補の十三章で詳説。



(1) 三十分以上濡れ放しにしない

小さな一石

昭和五十四年、盛岡市で開かれた全国老人福祉施設大会は、任運荘にとって特に意義深いものとなった。すでに、拙著『老人ホームはいま』一章でふれたことであるが、会場でおむつ交換は一日四、五回ていどにすぎないことを知らされた私たちは、それは福祉の名に値しないと、機会あるごとに主張した。それから五年、ようやくおむつは随時交換が望ましいという考えが定着しだした。五十七年の大会（大阪）のおむつ問題部会では、参加予定者へのアンケート調査で「定時交換を是とする者は一人もいなかった」と報告している。

この変化は老人ホーム利用者だけでなく、日本のお年よりのために喜ぶべきことと信じる。なぜなら、在宅のお年よりでも、病院や老人ホームに倣って定時で換えられている場合がある

からである。その意味からであろう、『老人問題解説事典』（森幹郎氏・59年）一五一頁で記している。「老人ホームのおしめ交換は従来から定時であった。……ホーム関係者の間では何人もこれをあやしむことがなかった。これに対し、随時交換を当然のことと主張し、実行に移したのが大分県の任運荘である。……施設長吉田は〝任運荘では三十分以上は濡れ放しはしない。たぶん、現在の職員配置基準ではこれが極限だろう〟と書いている」。

さて、その本質と実際論については、月刊『老人生活研究』（59・2月号）に寮母・三浦恵美子「随時交換とおむつ外し」に詳しく説明されている。また、拙著『旅路の終わりで』三章には更に詳しくふれている。ここでは、「随時交換とおむつ外し」の実際の部分だけを抽出して掲げよう。但し五十九年二月の執筆当時の数字をそのままにしているので、現在六十三年では少しちがってくる。

「その方法と実際」——三浦恵美子

基本は随時交換

「どんなごちそうよりも、いつも乾いたおむつに包まれていたい」と、任運荘のひとりの老人が言いました。この言葉は、おむつをしている老人のぎりぎりのところからの切なる願いの表現であります。

では、任運荘の「随時交換」の実際を報告します。

訴えのできる人はもちろんのこと、訴えや意識のない人に対しても濡れたらすぐ換えることにしています。じつは「すぐ」という言葉には相当の問題点がひそんでいます。すぐ換えている場合が多いが、例外的にすぐに換えていないこともあり得るのです。

それは、最初におむつ交換に行って出ていなかった人にとって、その後他の人のおむつ交換にまわっている間に、排尿しておればおこり得るのです。だから、そのお年寄りにとってはすぐ換えてもらっていないことになります。ですから、どんなことがあっても私たちは、三十分以上はおむつは濡らさないということを最低目標にしています。

まず、勤務状態について述べます。定員五十名の小規模ホームですので、直接介助の寮母は総員十四名です。夜勤明け、定休日等を除くと多い日で八名、少ない日は六名、それに看護婦、指導員が加わります。

清掃、洗濯当番を除いて現場の直接処遇担当は四名です。限られた職員数でお世話をするので、頻尿の人を寮母室の近くに移しています。それでおむつの確認が容易になりました。

私たちは「おむつ交換記録表」に従って行動します（表1）。表の形式は何度も改正してきました。おむつ交換で一番心に留めているのは、上の段の排泄の有無を全く言えない常時おむつ使用者です。この人たちについては体調、排尿間隔をその都度把握、確認します。三十分毎に見ていますので濡れていなかった時は、心に留めておき、おむつ交換を行った時だけ〇印をつけます。

表1　おむつ交換記録表

(59. 2)

状況			
介助方法による記号	水分補給 ∠ 体位変換はその都度行う	おむつ交換(尿)…○ おむつ交換(便)…● 汚物処理……⌀	介助(尿)…△　△(−) 介助(便)…▲　▲(−) 介助したが出なかった
10月4日	(東担当者) 山田、加藤	(西担当者) 森、羽田野	(夜勤者) 衛藤、広瀬

		氏名	時間 9 10 11 12 13 14 15 16 17	備考	時間 18 19 20 21 22 23 24 1 2 3 4 5 6 7 8	備考
排泄の有無を知らせることが出来ないが一日一回でも尿器介助を試みる	おむつ使用者(常時)	A(女)67歳	水 体 ○ △ ⌀ ○	入浴	∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	良くねむり尿も逆かった
		B(女)78歳	△ ⌀ ○ ○	肛門周辺少し赤い 清拭、アクロ塗布	∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	仙骨部発赤 よくねむる アクロマイシン
		F(女)81歳	○ ○ ○ ○ ○ ○	仙骨部注意 入浴、アクロ塗布	∠ ∠ ∠ ∠ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	肛門周辺すこしただれ 夜間1回清拭 アクロマイシン
	おむつと尿器併用者	H(男)86歳	⌀ ⌀ ⌀ ⌀ ⌀	仙骨部、表皮むけ 清拭、ナース処置	∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ⌀ ⌀ ⌀ ⌀ ⌀ ⌀ ⌀ ⌀	アルコールマッサージ 左腸骨部 アクロマイシン
		K(男)82歳	● ● ● ●	入浴、排便の為尿器不使用	∠ ∠ ∠ ∠ ∠ ● ○ ● ● ● ● ●	便回数多い 排便毎に清拭する
おむつ外しに努力する	おむつと尿器介助併用者	L(女)95歳	⌀ △ ○ ○ △ ⌀	清拭	△ ⌀ △ ⌀ ○ ⌀ △ ⌀ △	
		Q(女)70歳	⌀ △ ⌀ △ ● ○ ○ ○	入浴	△ ⌀ ○ ○ △ ⌀ ○ ○ ○ ○	
一部介助が必要	ポータブルトイレ介助者	R(女)80歳		入浴	△ ⌀ △ ⌀ △ ⌀ △ ⌀ △ ⌀ △ ⌀ △ ⌀ △	
		U(女)86歳	▲ ⌀ ○ ○	入浴	○	
	声がけが必要	V(男)75歳	○ ○ ○	失禁にて着替える	○	失禁にて着替える
	トイレ介助	X(女)79歳	△ ⌀ △ ▲ ▲	トイレ介助するも出ない、夕方より排便	△ ⌀ △ ⌀ △ ⌀ △ ⌀	

日中のおむつ交換は朝食後の九時から夕食後の五時三十分まで、清拭車を使用してのおむつ交換は七回です。しかし、午前中はその間をぬって寮母主任が、排泄の訴えのできないおむつ使用者を中心に見てまわります。午後からはトイレの清掃担当者が主任と交替してまわります。濡れていないか見たあとは、枕元に常備してある衛生ナプキンで手を拭き、次の仕事にかかります。こうして日中は全員でおむつ使用者に気を配ります。

次に夜の状態。夜勤寮母は二名です。寮母室を中心に東西に居室が分かれていますので、一人ずつ分かれます。排泄を知らせることのできない頻尿の人から先におむつを見ていきます。

十時半から朝の四時三十分まで三時間交替で仮眠に入ります。その間寮母一人でお世話をします。やはり、訴えのできない先程濡れていなかった人から先に見ていきます。出てなかった時は、巡回の終わりにもう一度手をいれてみます。夜中は熟睡していることが多いので、一回の巡回で三人から四人位しかおむつは濡れていません。水分補給、体位変換など行っても、一人にかかる時間は約五分。だから寮母一人でおむつ交換にまわっても二十分程度です。記録をしたり、ナースコールに応じながらポータブルトイレ介助や尿器介助等を行っても三十分程度で終わります。

緊急の時は仮眠の寮母も起きて介助にあたります。

夜中のおむつ確認には枕元灯を使用し、そっとふとんの下から手を入れる等、できるだけ安眠の妨げにならないようにしています。おむつ交換記録表に水分補給の欄を設けています。そ

れは投薬等で口の中が乾きますので、物言えない人にはおむつ交換の時に一口でも樂呑みのお茶をあげます。しかし、多くのお年寄りはお茶をあげようとすると、「飲むとすぐシッコがでるからなあ」と遠慮しがちです。だから、せめて食べたい物を安心して食べ、安心して排泄ができ、いつも乾いたおむつでいることができるよう、それを最低必要限度の処遇と考えています。（しかし、現在はおむつ報知機を採用しているのでその必要はなくなりました。おむつが濡れた時点で、表示板に表示されるので、すぐわかります。）

暴論＝「おむつ否定」

最近、「おむつ否定」というスローガンで「おむつ外し」が一部に提唱されています。結論から先にいって、私たちはどうしても賛成することはできません。おむつを外せる見込みのある人には当然外すように努力すればよいのです。しかし、尿意のない人や、身体的不自由から訴えのできない人を、それと同じように考え、一方的におむつをするのはだめだと、「おむつを否定」することはできません。随時交換は目的ではない手段だとか、おむつ外しだけが目的だとか、そういう言い方はこっけいです。手段とか目的とかそんな区別は何の意味もないからです。お年寄りに必要なことをする、それだけで十分です。ましておむつ外しを目標としていながら、おむつの外せない人に対しては定時交換でよいとするならば、おむつ外しの真の意義は何なのかと疑問に思います。

私たちは「人間の尊厳とは人間本人が主張するもので、おむつをしようがしまいが、人がはたから認めるとか、認めないとかいうものではない」と考えます。羞恥心は人間にのみ存するものです。そして、本当の羞恥心とは恥ずべきを恥じる心です。おむつをしたからといって何を恥ずべきことがありましょう。おむつをしているお年寄りを恥ずべきと考えることこそ恥ずべきです。じぶんの親が晩年におむつを使うようになったら、もう親ではないと考えるひとがいるとすれば、それはもうひとではないでしょう。

だから「おむつ否定」の立場は、単におむつだけを否定しているのではなく、人間そのものまで否定していることになってしまいます。たかが排泄の自立いかんで、人間的価値を判断するほど浅薄な考えがあるでしょうか。

おむつを使用しているある婦人は、片麻ヒで脳軟化、言語障害もあるのですが、おむつ交換の度に、不自由な片足で精いっぱいお尻を浮かし「おおきに、なあ」と言います。尿器介助やおむつ交換の度に手を合わせる人。もの言えない人のおむつを換えると、隣のベッドの老人が「おおきに」と代わって礼を言います。

このように、私たちの「おむつが濡れていて気持ちが悪かったでしょう」と言う心と、される側の「ありがとう」と返す共感の世界がそこにある以上、おせわをする方もされる方も、お互いの尊厳はいささかも傷つけられることはない。かえって、人間としての尊厳を意識するこ

との方が多いのです。

おむつ外しの実際

開所して満八年間、延利用者数は一三二人、そのうち六九人がおむつ使用で入居しています。約半数です。五十年の開所当時は入居者五十人に対しておむつ使用が十五人でしたが、しだいに増え五四年には三十人にもなりました。それで、おむつ外しを目標に食事はベッドから離れてテーブルでという寝食分離の方針から、「全員離床」に取り組みました。その結果、五六年にはおむつ使用者が十二人になりました。

五八年に現在の利用者全員の排泄状況をチェックし、表2「排泄状況表」（58・6・20現在）のように分類しました。定員五十名中常時おむつ使用者はA欄八名。排泄の訴えもできず尿感覚もないのでおむつを外すことの不可能な人たちです。B欄は男性のみで安楽尿器を使用していますが、便はどうしてもおむつにしなければなりません。おむつと尿器併用です。

C欄五名は一人を除いて一度は完全におむつが外れましたが、病気で再度おむつをあてるようになった人で、もう一度おむつ外しをしようと努力をしています。D欄の五十人中三九人は一度はおむつをあてたことのある人です。内訳は入居時からおむつ使用という人が十九名、病気でおむつ使用になった人が二十名です。そのうち、おむつが完全に外れた人は三五名です。残り四名は外れたおむつを、またあてるようになりました。

表2　排泄状況表（58年6月現在）

(A)

排泄状況	氏名	年齢	性別	病名	便尿意	意思有無	コントロール	800cc	1000cc	1500cc	平均交換回数	備考
排泄状況が出ないが（常時）オムツ使用者	(R)	77	女	脳出血後遺症	△	○	△					〃
	(Q)	95	女	変形性膝関節症、右大腿部骨折後遺症	△	○	△					〃
	(P)	85	女	メニエール氏症候群、下肢不自由、脳硬塞後遺症	△	△	△		○		11	〃
	(O)	70	女	脳出血後遺症、大腿部骨折、右麻痺、慢性膀胱炎	△	○	△		○		11	〃
	(N)	76	女	脳出血後遺症、下肢不自由	△	○	×		○		11	便意意の分から時、排尿間隔の遠い時尿器使用、時々安心パンツに
オムツ併用	(M)	77	男	脊椎損傷後遺症、全身不自由	△	△	×	○			3	〃
	(L)	82	男	脳卒中、冠不全、右麻痺	×	×	×		○		9	〃 軟便が少しずつ何日も続く
	(K)	72	男	変形性脊椎症、出血性膀胱炎、パーキンソン病	×	×	×				17	〃 膀胱障害の為常に尿がしずつ出ている
	(J)	99	男	前立腺肥大症、白内障（失明）、難聴	×	×	×	○	○		14	〃
尿器を知らず無知	(I)	86	男	高血圧症、慢性膀胱炎、言語障害、全身不自由	×	×	×	○			9	尿のみ安楽尿器使用
オムツ介助	(H)	69	女	子宮癌（治癒）、人工肛門、言語及び聴覚障害、大腿骨折後遺症	×	○	×				13	人工肛門のため随時自分で交換、汚物はその部度毎母が始末する
	(G)	79	女	交通事故後遺症、脳出血後遺症	×	○	×		○		12	〃
使用	(F)	81	女	冠不全、脳血栓、左半身麻痺	×	○	×			○	10	排尿間隔の遠い時尿器介助を試みる
	(E)	81	女	脳軟化症、両下肢不自由、言語障害	×	×	×	○			12	体をいつも動かすので尿器使用は不可能
	(D)	90	女	高血圧症、右麻痺、言語障害	△	△	×		○		9	〃
	(C)	72	女	脳軟化症、右麻痺、言語障害	×	○	×			○	10	〃
	(B)	78	女	脳軟化症、言語障害、全身不自由	△	○	×	○			7	〃
	(A)	67	女	脳出血後遺症、言語障害、全身不自由	×	×	×			○	平均11	排尿間隔の遠い時尿器介助を試みる

(B)

排泄状況	氏名	年齢	性別	病名	便尿意	意思有無	コントロール	800cc	1000cc	1500cc	平均交換回数	備考
排泄の1日オムツ併用	(M)	77	男	脊椎損傷後遺症、全身不自由	△	△	×					〃
	(L)	82	男	脳卒中、冠不全、右麻痺	×	×	×	○			9	〃 軟便が少しずつ何日も続く
	(K)	72	男	変形性脊椎症、出血性膀胱炎、パーキンソン病	×	×	×		○		17	〃 膀胱障害の為常に尿がしずつ出ている
	(J)	99	男	前立腺肥大症、白内障（失明）、難聴	×	×	×	○			14	〃
尿器を知らず無知	(I)	86	男	高血圧症、慢性膀胱炎、言語障害、全身不自由	×	×	×	○			9	尿のみ安楽尿器使用
オムツ介助	(H)	69	女	子宮癌（治癒）、人工肛門、言語及び聴覚障害、大腿骨折後遺症	×	○	×				13	人工肛門のため随時自分で交換、汚物はその部度毎母が始末する
	(G)	79	女	交通事故後遺症、脳出血後遺症	×	○	×		○		12	〃
使用	(F)	81	女	冠不全、脳血栓、左半身麻痺	×	○	×			○	10	排尿間隔の遠い時尿器介助を試みる
	(E)	81	女	脳軟化症、両下肢不自由、言語障害	×	×	×	○			12	体をいつも動かすので尿器使用は不可能
	(D)	90	女	高血圧症、右麻痺、言語障害	△	△	×		○		9	〃
	(C)	72	女	脳軟化症、右麻痺、言語障害	×	○	×			○	10	〃
	(B)	78	女	脳軟化症、言語障害、全身不自由	△	○	×	○			7	〃
	(A)	67	女	脳出血後遺症、言語障害、全身不自由	×	×	×			○	平均11	排尿間隔の遠い時尿器介助を試みる

(C)

排泄状況	氏名	年齢	性別	病名	便尿意	意思有無	コントロール	800cc	1000cc	1500cc	平均交換回数	備考
オムツ介助	(Q)	95	女	変形性膝関節症、右大腿部骨折後遺症	△	○	△					〃
オムツ併用	(P)	85	女	メニエール氏症候群、下肢不自由、脳硬塞後遺症	△	△	△		○		11	〃
	(O)	70	女	脳出血後遺症、大腿部骨折、右麻痺、慢性膀胱炎	△	○	△		○		11	〃
	(N)	76	女	脳出血後遺症、下肢不自由	△	○	×		○		11	便意意の分から時、排尿間隔の遠い時尿器使用、時々安心パンツに

(D)

おむつを使用したことがある　39人（病気で使用した　20人　入居時から　19人）

完全に外れた人　35人

外れない人　4人（Cの欄に逆戻りした）

(E)

排泄状況

トイレ使用　17人（完全に出来る　9人　手助けを要する　8人）

ポータブルトイレ使用　10人（自力　5人　介助　5人）

尿器使用　4人（自力　2人　介助　2人）

座敷トイレ使用　1人

E欄は、排泄の状況によって分類しました。トイレ使用十七名。うち自分で完全に出来る人が九名、少し手助けを要する人が八名。ポータブルトイレ使用は十名。尿器使用が四名、座敷トイレ使用が一名です。

老いの流れにそって

Sさん（八四歳）は家では嫁が働きに行っていたので、仕方なく排泄はおむつにしていました。だから入居して三日目にはおむつが外れました。「こんなに気持ちのよいことはない。なんだか偉くなったようです」と、ベッドの生活から車イスの生活に変わりました。しかし、排尿のことはいつも頭から離れず、多い時は一日十六～十七回もします。一番回数の多い時間帯は朝の目ざめから離床するまでと、夜ベッドに入ってねつくまでです。朝は四時過ぎから六時の起床まで四回程ポータブルトイレ介助を行います。

初めの頃は「おしっこが近いから起きたくない」といっていました。そこで、車イスに乗ったまま尿器をさし込んで介助をするようにしました。「ああ、これならいつおしっこにいきたくなってん安心じゃ」と積極的に起きるようになりました。

おむつ外しがこのように大きな自信につながるということは重要なことです。しかし、いかにSさんと私たち双方が、おむつとの苦しい戦いを続けていても、早晩おむつに戻ることは明らかです。仮に、本人におむつを外す意思が残っていても、老衰期にあれば肉体的な努力を強

いられるおむつ外しは時として、重い負担にもなるのだということを、同時に忘れてはなりません。

ある施設で、おむつ外しだけが原因とはいいきれないが、ついに精神的重圧に負けてしまった悲しい例もあります。健康な若い者の考え方だけで、何が何でも「おむつ外し」をするのだというようなことは、ある意味で一種の傲慢につながりかねないと思います。

お年寄りのその時々の心身に応じた、つまり、老いの姿にそったおせわをするということが大切だと考えざるをえません。

(2) 日本初のおむつセンサー

新鋭機おむつセンサー

六十二年九月、おむつ濡れ通報の精密機械を発明した「ニッポン高度紙工業」（本社・高知県春野町）の石鍋広政氏が大がかりな機械を搬入し、試用してほしいと要望。

説明は単純明快、ものいえぬおむつ使用者にとっては最高の味方である。おむつの上に紙状の感知テープをおくだけで、濡れると感知し、コンピューターシステムで表示板に時間等必要事項が記録されると同時に、音と光で暗号表示がされる。一定時間、濡れたシグナルがない時も表示される精巧さである。一機で四十人分を受け持つ。随時交換の重要さを主張する以上、

価格を考えないとすれば、これを試用しないわけにはいかない。

しかし、私はためらった。機械に寮母がふり回され、過労にならないか。今の任運荘の寮母の労働条件は限界に至っている。お年よりには今まで通り三十分以内の交換でがまんして頂くしかない。価格も一千万円。

石鍋氏は言う。「試用だけでよい。任運荘のおむつ交換の理論と方法をコンピューター化したものだから、まず任運荘に使ってもらいたい」。ともあれ、寮母たちに説明し、了解することが先決。説明を受ける寮母の表情は予想以上に厳しい。沈まりかえったまま。機械に駆使されるとなれば、心身の苦痛はよういに予想されるからである。

機械は助けになり

いよいよ配線、電光掲示板等の工事をする前に、全館放送でお年よりにそのことを説明し、了解をうることも忘れてはならない。ましてや、自分の部屋に突然工事人が入って作業し、廊下は雑然と一時通行止めになるのであるなら、事前了解は重要なことである。

放送で説明されると、職員とちがってお年よりの反応は頗る明るい。

「まあ、便利のいいものができたんですな、ありがたいですなぁ」（衛藤房江さん）。「長生きはするもんですな」（後藤ヌエ子さん）。何れもおむつをしない人たちである。

天井取り付け工事を終わった池川氏がふと気がつくと、車椅子のお年よりがすむのを待って、

いま通ろうとしているのである。思わずお年よりの手をとり、「すみません！」。「なんの、なんの。わたしたちこそ」と笑顔を返す佐伯さん。美しい風景だ。

活動開始。六十二年十月二日。私たちにとって記念すべき日である。本格的な操作は夜勤から。

翌朝の報告は極めてさわやかであった。—朝の一番混む時間帯の六時から一時間は大変だった。電光板がとても気になるし、お年よりもわざわざ知らせにくるし、てんてこまい。それ以外は、今までのようにおむつに手を入れてまわらなくてもすむので、かえって助かった。機械に追い回されると思っていたが、機械が仕事を手助けしてくれるので、ありがたい。

使いなれて

それから半年、いろいろの経験を経て現在は訴えの出来ないねたきりの五人に使用している。電光掲示板に表示が出ると、「ああ、いまNさんにおしっこが出たんだな」と心に留めておき、やりかけの仕事があるときはそれを済ませて、おむつ交換に行く。つまり機械に振り回されないよう、余裕ある対し方を心がける。

今までのように、ぬれていないかと、必ずしも手を入れて回らなくて済むのでその点、寮母たちの仕事も助かる。おむつセンサーは、随時交換を行う上での補助手段と考えて、自在に活用することがポイントのようである。